

介護をほどく、暮らしにひらく —地域の日常と連続する福祉建築—

加藤 夢望

指導教員 梅原 佑司

高齢化
日常

介護と地域
暮らし

フレイル
連続性

1. 背景

現代の日本では高齢化が進行し、住み慣れた地域で高齢期を過ごすことの重要性が指摘されている。その一方で介護施設は運営上の合理性が優先される結果、地域やこれまでの人生から切り離された場となりやすく、入所に対する心理的な抵抗感が存在する。高齢者にとって住み慣れた地域はこれまでの暮らしの記憶が蓄積された環境であるため、介護が地域と切り離されたものではなく、これまでの人生の延長線上にあるものとして位置付ける空間の在り方が求められている。

2. 目的

本設計では、介護を人生の終盤に突然現れる機能として捉えるのではなく、地域の日常の暮らしの中に存在するものとして、介護施設と地域の日常を緩やかに接続する建築計画の提案を目的とする。

3. 対象敷地

本設計の対象敷地は岐阜県郡上市白鳥町の長良川沿いに位置する。この地域は現在高齢化率が 37.5%と少子高齢化が進行しており、この地域では小学校区による小さな拠点のエリア設定を行い、日常の生活機能を集約する取り組みがされている。敷地周辺には小中学校、駅など主要機能が点在しており、当敷地がそれらを利用する地域の人々にとっての日常的な寄り場となることを目指す。



図 1 敷地周辺図

対象敷地は山並みや河川、桜並木といった自然環境に囲まれ、四季の変化を感じられる環境にある。このように、本敷地はこの地域で暮らしてきた人々にとっての日常の風景が目一杯感じられる場所であり、この敷地で自然の中に建つからこそ、介護と地域が互いに存在することを許容できる関係性を実現すると考える。



図 2 敷地写真

4. 提案

本設計では介護福祉施設を包括した「暮らしの延長」としての地域拠点の場を設計する。

介護施設の存在する場がこの地域で暮らす全ての地域住民にとっても、日常の延長線上で気軽に立ち寄ることのできる開かれた場であれば、介護者も地域住民も互いを日常の風景の中の存在として受け入れる関係性が生まれる。そして、介護者は地域から切り離されることなく暮らすことができると考える。

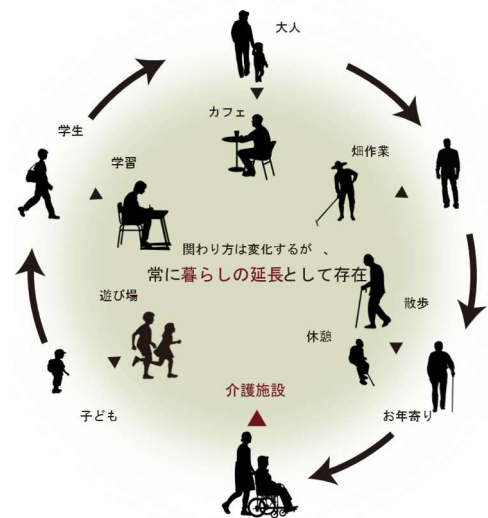


図 3 地域住民の関わり方

4.1 介護プログラム

次に示す 2 つの介護サービスを敷地に計画することで段階的な介護の連続性を構成する。

- ① 小規模多機能型居宅介護
「通い」「訪問」「泊まり」を通じた地域密着型介護サービス。条件：要支援 1~2、要介護度 1~5。
- ② 地域密着型 特別養護老人ホーム
7・7・6 人のユニットによる入所型介護サービス。入所条件：要介護度 3~5。



図 4 介護の段階性

4.2 フレイル予防

当敷地ではこの地域で暮らす高齢者が健康な高齢期を過ごすために重要なフレイル予防としての役割も担う。フレイル…加齢に伴い気力や体力など心身の活力が低下した状態。

専用の運動空間ではなく、日常の中で自然に歩き、立ち止まり、人や植物に出会い、刺激を得ることでこの場で健康に過ごすことを目指す。

身体的、心理的、社会的の 3 軸からそれぞれ、道を歩く、植物や自然の変化を感じる、多世代交流や役割を担う、ことを通してフレイル予防を促す。

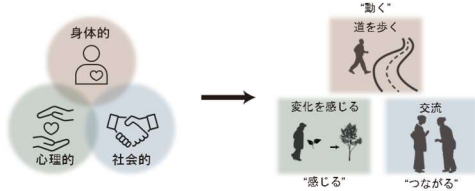


図 5 フレイル予防

5. 設計手法

5.1 配置計画

単一の大規模施設とするのではなく、敷地に対して介護度によって各機能を 4 棟に分けて配置し、それらを緩やかな外部動線で接続させる構成とする。これにより、建築の規模を地域の住宅スケールに近づけるとともに、間に地域が入り込める余白が生まれる。

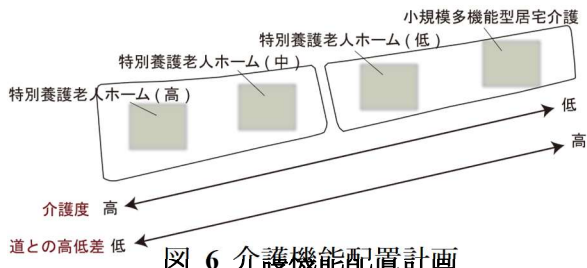


図 6 介護機能配置計画

5.2 平面計画

個室配置を規格化された形式ではなく、雁行させて配置することで、外部と接続する面が増え、自然を地域と間接的に共有し外部が常に意識される空間となる。またずらすことで内部に多様な居場所が生まれる。

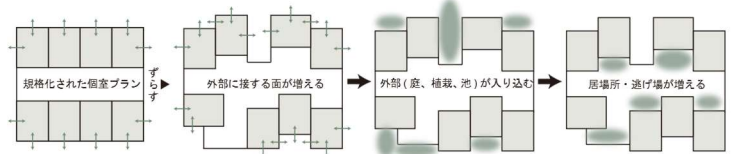


図 7 雁行した平面計画

5.3 個室計画

各個室の屋根を拡張させることにより、内部に中間領域をつくる。プライベート空間である個室から一歩でるとすぐパブリックな共有空間という関係性ではなく、間に緩やかなセミパブリック空間が生まれ、自分の居場所が広がる。

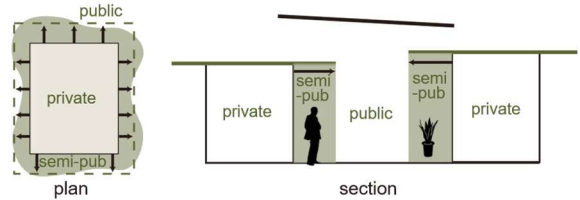


図 8 個室の屋根の拡張

5.4 分解した屋根

屋根を分解、拡張することによって光や風などの周辺環境を取り込む。さらに地域に対して多様な中間領域が生まれ、地域が緩やかに入り込むことができる接続点となる。また、内部の光や活動が地域へ漏れ出すことで、介護の存在が地域住民に日常的に認識される。

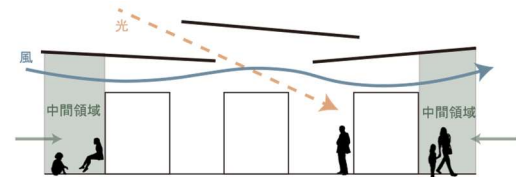


図 9 屋根構成

5.5 地域に開く機能

敷地内に地域に開くポイントを点在させることで地域との接続点をつくる。

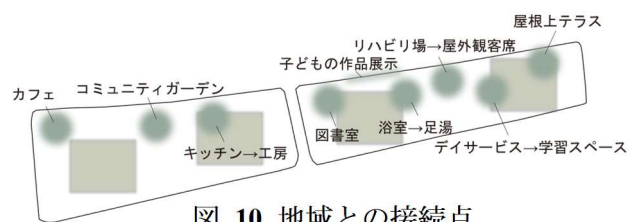


図 10 地域との接続点

6. 設計内容



図 11 平面図

6.1 地域に開かれた機能

(1) カフェ

敷地内で最もパブリック性の高い場所かつ要介護度の高い特別養護老人ホームに隣接した場所に常に開かれたカフェを計画する。地域の人々の賑わいの声や香りなどの五感を通じた接点を生む。



図 12 カフェ

(2) コミュニティーガーデン

介護者が車椅子のまま畑いじりができるようにレイズドベッドを設け、地域住民同士のつながりや地域の子供と収穫イベントを行い、畑を通じた間接的なつながりを生む。



図 13 コミュニティーガーデン

(3) キッチン→工房

特別養護老人ホーム内で普段利用されるキッチンに時に地域に開き、ワークショップやお菓子作りなどのイベントを行う際の工房として利用する。イベントの際はテラス部分がオープンダイニングとなり一体的に利用される。



図 14 キッチン

(4) 図書室

要介護度の低い特別養護老人ホームに隣接した場所に地域の図書室を計画する。施設利用者や地域の中高校生による簡易的な読み聞かせを行う。



図 15 図書室と作品展示

(5) 浴室→足湯、子供の作品展示

特別養護老人ホーム内で普段利用される浴室を時期によって地域に開き、足湯や簡易プールとして利用する。また、道との高低差を活かして通り道の壁沿いに地域の子供の作品展示を行う。



図 16 浴室

(6) ステージと観客席

日常的には子どもの遊び場やリハビリの場として利用される広場をステージに、移動としてのスロープを観客席として、地域の子どもの発表会やイベントを行う場として利用する。



図 17 ステージと観客席

(7) デイサービス→学習スペース

小規模多機能型居宅介護は日中と夜間の利用者数に差があるため、日中機能訓練室として利用する空間を夕方から中高生の放課後の学習スペースとして地域に開く。



図 18 学習スペース

(8) 屋根上テラス

敷地と道の高低差が最も高い敷地北側において、地域の人々にとっての動線の一部が小規模多機能型居宅介護の屋根に位置し、そこが居場所となる。道を歩く体験が屋根と連動し、上にあった屋根が徐々に近づき、床となるこの敷地だからこそその空間体験を感じられる。



図 19 屋根上テラス

6.2 施設内部

平面的なずれと屋根の分解・拡張により介護空間内部からは周辺の環境を目一杯感じられる。

7. まとめ

本設計では、介護施設を地域から切り離された存在としてではなく、日常の延長として地域環境に組み込む建築のあり方を検討した。この場所で地域の人々の生活行為を織り込み、自然の豊かさを享受する建築とすることで、介護と暮らしの連続性を支える環境形成の可能性を示した。これまでの人生との連続性や住み慣れた地域で暮らし続けることが、この地域で暮らす人々にとっての豊かさであると考え、本設計を通して、介護施設を「入所する場所」から、「暮らしに関わり続ける場」へと再定義することが期待できると考える。

8. 参考文献

- 1) 国土地理院基盤地図情報
<https://service.gsi.go.jp/kiban/>
- 2) 郡上市 Gujo City | 白鳥
https://www.city.gujo.gifu.jp/admin/info_shirotori/
- 3) 郡上市地域復興計画
<https://www.city.gujo.gifu.jp/admin/detail/9685.html>
- 4) 介護施設の種類
<https://www.i-kaigo21.jp/media/career-change/kaigo25/>